

吉田兼好：日本人の感性と思想

大阪芸術大学 教養課程 教授 純丘曜彰

本研究は、当初、古典として広く読み継がれている随想『徒然草』の作者である吉田兼好の仏門的・武士道的な死生観と真善美の関係を通じて、現代の我々の中に息づく日本人としての感性と思想を問い直すことを目的としていた。ところが、彼の生きた時代と彼の立場を合わせて考えると、その表層的で一般的な表現の背後に、もっと時事に即した裏の意味が隠されていたのではないかと、との疑念が湧いてきた。そうでなければ、彼がなぜ突然に筆を折り、これを文箱に封印してしまったのか、理解しがたい。

『徒然草』が知られるようになるのは、兼好の没後七〇年、南北朝時代になってからである。とくに、神道を根、仏教や儒教を花実枝葉とする反本地垂迹説を唱えて室町幕府に取り入ろうとする吉田神道の吉田兼俱が、同姓類名の吉田兼好を先祖の一門としたことによる。このことから、『徒然草』もまた、その後、太古より続いてきたとされる神道的な日本の自然人生観を根とし、これに仏教や儒教の理念を花実枝葉として飾ったもの、という前提で解釈されてきた。そして、『徒然草』から日本人の感性と思想を探ろうという本論の当初の目論見も、この解釈を出発点としていた。

しかるに、史料に基づく近年の小川剛生の実証的研究によれば、吉田兼俱による兼好の位置づけは捏造であり、事実としての兼好は、鎌倉武士の縁者で、京都に移り、名目上の出家をしながら、荘園安堵のための「寄進」の仲介業をしていた、とされる。この時代、後醍醐以来、皇統が乱れ、血筋の異なる上皇・天皇・皇太子が勢力を争い、鎌倉幕府もまたその裁定で問題に巻き込まれていた。くわえて、鎌倉幕府も、恩賞無き元寇撃退の後、將軍代理の執権どころか、さらにその代理内管領が直接に全国を支配する、という形骸化が起こっていた。

ここにおいて、後に執権として鎌倉幕府を再掌握することになる金沢貞顕、および、その息子の貞将が、京都および西日本の治安を担当する六波羅探題に下り、兼好がその世話をした。おそらく、兼好は、出家者として俗世の問題に無関心を装いながら、「寄進」の仲介を通じて知りえた関西の有力者や有力寺社の動勢を伝えるインテリジェンスの役割を果たしていたことと思われる。

かような立場にある兼好が、むしろ明日にも起こりかねない倒幕の動きを表立って騒ぎ立てるわけにはいかない。かといって、彼の知りえた危機的な状況は、彼の内面の焦燥感を駆り立てたにちがいない。神道は

もちろん仏教でもなく、その憤懣やる方無い現実のいらいらだちこそが、『徒然草』の根底にある兼好の思想ではないのか。

たとえば、第四十一段に、木の上で競馬見物をしながらうたた寝する法師の話がある。これを笑う人々に、兼好は、死が目前にありながら見物などしている我々も似たようなもの、と言ったところ、人々は深く感心してくれた、と言う。これに兼好は、「人、木石にあらねば、時にとりて、ものに感ずることなきにあらず」と付している。この最後の一文は、世間の人々も、木や石ではないのだから、近く京で戦乱が起こり、それに巻き込まれて死ぬかもしれぬことをすでに察しているぞ、というのが真意だろう。

その他、たとえば花鳥風月など、風流を語る段でも、「よしなしこと」と言いながら、兼好にはそれに仮託した別の意味があったのではないかと。もとより兼好は二条派歌人としても知られ、言葉に表裏の意味を重ねる『新古今』以来の技巧にも精通していた。だが、兼好は、彼の知りえた市中内外の世情を、裏の意味に隠して、だれに向けて書いたのか。

これについては、邦良親王や堀川家の人々など、古来、さまざまな憶測があるが、彼の表現の高度な技巧性から、相当の和歌古典の教養を必要とする。はたして、それだけの人物が、彼のまわりに実際に存在したのだろうか。「身にしみて、心あらん友もがなど、都恋しう覚ゆれ」（第百三十七段）というところなどをみると、結局、それが得られないまま、戦乱が始まってしまい、だからこそ、彼はこの書を誰にも読ませないまま、封印してしまったのではないかと。

まして、その後、執筆の時代背景も失われ、彼が語ろうとしていた真意は、いよいよわからなくなった。にもかかわらず、『徒然草』が我々の共感を誘うのは何か。それは、自然親和的な彼の個々の物事の感じ方などではなく、いまの感慨を人とは共有できない、いまここに居合わせた者だけしか知りえない、ただ、あはれ、としか言いようのない感慨の孤立感ではないのか。人は、それぞれに感じ入るところがある。しかし、それはいまここだけの刹那的なもので、ただ、それを誰とも共有できないといういらだちこそ共感できる。このパラドキシカルな孤立の共感こそ、兼好に代表され、和歌から近代まで通底する日本人の感性と思想なのではないか。